

チャーチルの世界的地位

田村幸策

一 チャーチル一代の功業を細説詳論することは、もちろん本稿の目的とするところではないので、差当ってはかれの片影を粗描することで満足せざるをえない。一八七四年一月三〇日夜、チャーチルの母は医師の忠告に反して舞踏会に出席中急に産気を催し、自宅に帰る時間的余裕がなかったので、会場の婦人衣装替室の一隅でチャーチルを生んだのである。かれは十二歳でハロー（中学校）に送られたが、四年半の在学中終始ビリから抜きあがることはできなかった。しかしかれがハロー在学中自国語たる「イギリス語」に非常な愛着愛好の心を覚えたことがかれにとつて終世の宝となった。

二 ヨーロッパ大陸の諸国が相次いでヒトラーに征服されてきた際、独り島国イギリスのみは降伏しなかった。「イギリスは決して降伏しない」と叫んだチャーチルの所信は、全イギリス国民をヒトラーのドイツから救いえたのみならず、他の多くの大国民に対しても、ヒトラーへの降伏はありえないとの確信を与えたのであった。週刊誌「スベックテーター」によると「われわれはチャーチルという人物が生存していたため自由な国民でありえたのだ」とき

え評している。それはかれが戦時の大宰相たるがためのみでなく、さらにまたかれが単に偉大な政治家であったがためのみでなく、偉大な個性をもった人物であったがためである。殊にかれは他の人間よりも、より多くの情緒と願望と短所とをもった人間であったがためである。「スペックテーター」誌はチャーチルを「愛すべく、しかも、誤りに陥りがちな人物だ」と評している。

三 しかし他人に順応することはチャーチルにとっては苦手であった。かれはむしろ規則を破ることを好んだ人物だといわれている。かれは人も知るごとく絶えずシガーを口にくわえていた。かれはかつて肉体的な運動をしたことはないにもかかわらず健康は驚くべきものがあつた。かれは「論争」で生活していたような人物だとさえ評されたほどで、喧嘩早いとか好戦的だとか形容されがちであつた。かれは議会の討論においても相手をからかったり、毒舌を吐いたりするので有名である。かれは議会人(下院)たること六十年に達するベテランであつて、しかもその間二〇冊以上の大著を發表している学者的精力家でもあつた。かれは兵士であり、歴史家であり、小説家であり、弁士であり、新聞記者であり、かつまた大国イギリスの政治家なのが、かれの略歴であつて、行くところ可ならざるはないのが、かれを世界歴史上の人物に押し上げた根拠である。かれの好みは美食と美人とであつた。なにごとをも徹底的にやることに趣味があつて、殊に細目にわたることに熱心であつた。実に羨むべく学ぶべき非凡な性格の持主であつて、かれの体内には活動力と生命力とが燃えさかつていたのである。

四 かつてロンドンの「エコノミスト」紙は選挙における落選と死亡とに関するチャーチルの見解を發表したことがあつた。かれは終戦の年(一九四五年)の選挙には落選したのであつた。そこでロンドンの「タイムズ」紙は特に「論説」をかかげ、チャーチルに対し今後の選挙に「無党派の世界的リーダー」として打つて出ることとともに、今

後もし落選した場合はいさぎよく政界を引退することの二点を提議した。これに対するチャーチルの回答は、第一点には苦しくとも私は闘っていきたい、しかし第二点は国民一般が私を見捨れば私は政界を去りたいと答えている。

五 チャーチルは一九六五年一月二四日午前八時、脳溢血の発作後一〇日目に死去した。享年九一歳。イギリス議会はかれのために今世紀最初の「国葬」を議決し、遺骨はチャーチルの生れた場所に近い父母の墓の所在地に葬られた。イギリスの桂冠詩人ジョン・メースフィールドがチャーチルのためにつくった詩の一節に「異変が発生して悲惨事を招き、多くの国家が混乱と滅亡とに陥った際、このイギリスも窮地に陥ったが、イギリスのみが唯一国滅亡を免れた際、イギリスの姿は岩石の如く堂々たるものがあった」と歌っている。

六 何人も偉大な人間であったレオナルド・ダ・ビンチが書き残したごとく、「一日の仕事を立派にやり終えれば、幸福な睡眠がとれうるがごとく、人生を立派に働き終えれば幸福な死を迎えうるのである」。チャーチルは政治上のことは別として、英語学上も多くの名著と名文句とを残している。たとえば「戦争には決意、敗北には反抗、勝利には寛大、平和には善意」だとの定義のごときもその一例である。多数の名文句を省かざるをえないことは筆者の無上の不本意とすることである。